

ト反駁シタラ、「ラ」國務卿ハ獨逸植民地諸島ニ必ズシモ皆同一ノ地位ヲ持タセル必要ハナイ。「ヤツプ」島ハ例外ノ場合トシテ少シモ差支ヘヌト答ヘ、牧野全權ハ重ネテ同島ノ海底電線問題ヲ論議スルニ先チ同島ノ地位ヲ決定スルノガ肝要デ、電線管理問題ハ枝葉ノ案件ダト應酬シ物別レニ終ツタ。超エテ五月七日ノ首相會議デ「ヤツプ」島ガ日本ノ完全ナル受託地域内ニ入ルコト丈ハ確定シタガ、海底電線問題ハ大正十年華府會議ノ開會中日米兩國間ニ協定ノ成立スル迄解決シナカツタ。

第三十六章 國際聯盟ニ就テ

「ウキルソン」大統領ガ國際聯盟ノ設立ヲ提唱セル動機

本章デハ國際聯盟ニ關シテ少シ述ベテ見ヨウト思フ、尤モ聯盟規定ノ解釋其他細カイコトヲ書ケベ限リガ無イカラ、是レハ専門的著述ニ讓ツテ此所ニハ極メテ難駁ナ然シ政治的ニ見テ多少興味アリト思ハレル事柄ヲ記憶ノママ叙説スルニ止メル。

國際聯盟設立ノ具體的動機ガ「ウキルソン」大統領ノ提唱ニ因ルコトハ、今更ラ書立テル必要モ無イコトデハアルガ、同大統領ガ初メテ之レヲ世界ニ聲言シタノハ、一九一六年十二月ノ「ノート」デ、其中ニ「來ルベキ平和ノ恒久ナランガ爲メニハ、組織立ツタ人道ノ力ニ依ツテ保障セネバナラス、勢力ノ平均ニアシザル各國ノ協同、各國ノ對抗ニアラザル共通ノ平和デナケレバナラス、勢力平均ノ代リニ世界ヲ通ジテ平和ト正義トヲ保障スル國際聯盟ヲ以テシナケレバナラス」ト高調シタノガ濫觴ダト記憶スル、次デ一九一八年一月ノ有名ナ講和ノ基礎十四個條ノ末條ニモ、同大統領ハ「大國ニ於ケルガ如ク小國ニモ、政治上及領土上ノ獨立ノ相互保障ヲ供與スル目的ヲ以テ、嚴然タル條約ニ依リ、國際聯盟ヲ創設セネバナラス」ト云フテ居ル。

此考案ガ世界戰爭ノ大災禍カラ受ケタ刺戟ニ基イテ居ルコトハ言ヲ俟タヌガ「ウキルソン」大統領ハ世界戰爭ノ起ルニ至ツタ原因ヲ主トシテ各國ノ勢力平均政策ニ歸シテ居ル、即チ獨逸伊三國同盟ト露佛同盟トノ對

立獨逸ノ勢力が増加シ之レト反對ニ露國ノ不振ヲ見ルニ及ビ、三國同盟ヘノ對策トシテ佛英協商ノ締結、是レガ大戰以前ノ歐洲ノ狀態デアツタ、均勢政策ハ斯クノ如ク一方デ團結スルト又他方デ團結スル、一方ガ勢力ヲ増加スレバ他ノ一方デモ之レヲ増サネバナラヌカラ、其團結ガ行詰マレバ自國ノ兵備充實ニ依ツテ勢力ノ平均ヲ維持スル外ハナイ、隨ツテ所謂軍國主義ニ傾クノハ已ヲ得ヌ、又其軍備ヲ充實スルニハ人口ト原料物資ノ増殖ヲ圖ラナケレバナラヌカラ、知ラズ識ラズノ間ニ帝國主義的政策ヲ採ルコトニ成ル、之レガ世界大戰ヲ惹起シタ原因ダカラ、斯クノ如キ危險ナ政策ニ代ルベキ新政策ヲ樹立セネバナラヌ、此見地カラ「ウキルソン」大統領ハ國際聯盟ノ設置ヲ提唱シタノデアル。

聯盟成立後ノ歐洲

筆者ハ「ウキルソン」大統領ガ國際聯盟ヲ提唱スルニ至ツタ動機ガ極メテ純デアルコトヲ疑ハヌ、又之レガ國際平和ノ大理想カラ出發シテ居ルコトモ疑ハヌガ、然シ國際聯盟ハ「ウ」大統領ノ蛇蝎視スル夫ノ勢力平均政策ヲ果シテ打破シ得タカ、又聯盟規約ヲ作ル當時乃至其後ニ於ケル各國ノ行動ハ果シテ能ク聯盟ノ大神ト一致シテ居タカ、以下簡單ニ之レヲ討研シテ見ヨウト思フ。

大正八年六月二十八日對獨平和條約ガ「ヴェルサイユ」デ調印サレタ直後、佛國ハ英米二國ト各別ニ保障條約ニ調印シタ、此條約ハ米國上院デ批准拒絕ノ結果、双方共實施サルルニ至ラナカツタガ、佛國ヨリ挑發セヌノニ獨逸カラ攻撃ヲ受ケタ場合、英米二國ハ佛國ヲ援助スルト云フノガ其趣旨ダカラ、純然タル同盟條約

デ、之レヲ變形シタノガ夫ノ「ロカルノ」條約デアル。此保障條約ニ次デ蘇聯邦ヲ目標トスル羅馬尼ト波蘭トノ同盟ガ結バレ、洪牙利ニ對スル羅馬尼「チエツコ、スロヴァキヤ」及「エーゴー、スラヴキア」間ノ通稱小協商ガ成立シ、又佛國ハ白耳義ト軍事協約ヲ結び、波蘭トハ同盟條約ヲ締結シタ、此他佛國ト「チエツコ、スロヴァキヤ」トノ條約、伊國ト「ユーゴー、スラヴキア」トノ條約等ヲ通觀スレバ、歐洲ノ如ク支那本部位シカ無イ小區域ニ三十近クノ多數國ガ對立シテ居ル場合ニ、勢力平均ノ維持ハ自國ノ生存上到底無視シ得ヌノデハナイカト思ハレル、殊ニ均勢主義ヲ忌憚ナク發露シテ居ルノハ聯盟事務局其モノデアルカラ面白イ。

聯盟事務局ノ構成分子

廣義ノ聯盟事務局ハ聯盟事務局ト勞働事務局トニ分レテ居ルガ、聯盟事務局ノ局長ガ英國人タル「サー、エリツク、ドラモンド」デ其次席ハ佛國人「アヴノル」氏、之レト反對ニ勞働事務局デハ佛國人タル「アルベール、トーマ」氏ガ局長デ次席ハ英國人「バトラ」氏ダ、斯クノ如ク英佛二國ハ均勢主義的妥協ニ依ツテ聯盟ノ機構内延テハ聯盟其モノノ牛耳ヲ把握シテ居ル、其麾下ニ例ヘバ聯盟事務局デハ日伊獨ノ三國カラ各次長ヲ出シテ、是亦互ニ均勢維持ニ腐心シテ居ル狀態デアル、高遠ノ理想ニ向ツテ邁進スベキ筈ノ聯盟ガ其常設的活動機關タル事務局ノ構成ニ於テ既ニ斯クノ如キ不純ノ空氣ヲ漂ハシテ居ル以上、此雰圍氣内ニ在ル事務局員ノ行動ヲ理想化セントスルガ如キコトハ、蓋シ無理ナ注文ダト思フ、又此種ノ事務局ヲ設ケルニ非

ザレバ満足出來ヌ國々ヲ代表スル諸員ノ意見考案ガ、結局如何ナルモノデアルカハ、大凡之レヲ想像スルニ難クナイガ、是等ニ付テハ追テ記載スル種々ノ事實ニ依ツテ讀者自ラ判斷サレンコトヲ希望スル。

聯盟規約案ガ委員會ニ提出セラルル迄ノ経緯

國際聯盟ノ成立ガ「ウキルソン」大統領ノ努力ニ依ル次第ハ既ニ述ベタ通りダガ、米國ニハ「アメリカン、リーグ、ツ、エンフォース、ピース」ナル協會ガアリ、又英國ニハ「ブリチツシュ、リーグ、オブ、ネーションズ、ソサイチー」設ケラレ、孰レモ戰後ノ平和政策ヲ講究シタ。英國政府ハ一九一八年ノ春委員會ヲ設ケテ具體案ノ作成ニ從事セシメ、此委員會ハ同年三月二十日報告書ヲ作ツテ政府ニ提出シタカラ、英國政府ハ之レヲ各自治領ト米國大統領トニ送ツテ意見ヲ求メタ、右ノ報告書ニハ十八個條ヨリ成ル規約案ガ添付サレテ居テ、委員長ハ「サー、ウオター、フキリモア」ダツタカラ之レヲ「フキリモア」報告書ト呼ンデ居ル。

「ウキルソン」大統領ハ「ハウス」大佐ニ「フキリモア」報告書ノ研究ヲ委嘱シ、同大佐ハ之レヲ参照シテ一九一八年六月十六日二十三個條ヨリ成ル自案ヲ作ツタガ「ウ」大統領ハ更ニ研究ヲ重ネテ翌月十三個條ノ規約案ヲ起草シタ。之レガ「ウキルソン」第一案デ、同大統領ガ講和ノ爲メ歐洲ニ出發スル際携帯シタノハ實ニ此案デアル。

一九一八年ノ夏頃カラハ聯盟問題ノ研究ハ英國ノ方ガ遙カニ米國ヨリモ熱心デアツタ、佛國デハ殆ンド無關

心ノ有様デ巴里ニ聯盟協會ノ設ケラレタノハ「ウキルソン」大統領ノ到着間際ダツタト記憶スル、是レハ無理モ無イコトデ佛國トシテハ解決スベキ重要ナ講和案件ガ非常ニ多イノダカラ、當時ノ佛國民ハ聯盟ノ様ナ理想の問題ニ興味ヲ感ズル餘裕ヲ持タナカツタシ、又一般ノ空氣ハ聯盟ノ實現性サヘ大ニ疑問視シテ居タ、佛國側ノ提議ニ係ル議事順序ガ國際聯盟問題ヲ最後ニ置イタノハ正ニ此雰圍氣ノ反影デアルガ「ウキルソン」大統領ハ之レニ反シテ先ヅ聯盟問題ヲ解決スベシト主張シ、正面衝突ヲシタノデ、英國ガ折衷案トシテ先ヅ主義ノ問題丈ケヲ定メ、詳細ハ委員會ヲ設ケテ研究サセタラト提議シ、漸ク折合ガ付イタ様ナ次第デア。從ツテ巴里ノ我大使館デモ講和準備ノ研究事項トシテ聯盟問題ニハ殆ンド手ヲ觸レナカツタガ、又日本内地デモ本件ヲ研究シタ模様ハ見ヘナカツタ。(聯盟委員會ニ提出サレタ佛國規約案ニハ一九一八年六月八日ノ日附ガ記サレテ居ル、此案ガ果シテ半年前ニ作ラレタトシテモ講和會議以前ニ各國意見交換ノ目的物ト成ツタコトハ無イ様ニ思フ)

「ウキルソン」第一案ハ十三條カラ成ル極メテ簡單ナモノデアツタ、大統領ガ歐洲ニ着イタ時ニ、英國デハ「スマツツ」將軍ト「セシル」卿トガ各々自案ヲ作ツテ待ツテ居タ、孰レモ大統領ニ渡サレタガ就中「スマツツ」案ニハ委任統治制度、聯盟理事會ノ設置等種々重要ナ新考案ガ含マレテ居ルノデ、大統領ハ其第一案ニ之レヲ追加スル必要ヲ認メ、補遺條項六個條ヲ起草シタ、之レガ「ウキルソン」第二案ト稱セラレルモノデ、一九一九年一月十日配布サレタトノコトダガ、我全權ハ受取ツテ居ラヌ。

「ウキルソン」第二案ニ對シ米國委員カラ種々ノ意見ガ出タ、其主タルモノハ「ブリッス」將軍ノト「ハン

ター、ミラー」氏ノトデア、大統領ハ此兩意見ヲ參照シテ更ニ第三案ヲ作リツツアツタガ、未ダ其完成セヌ中ニ一月二十日英國カラ公式ノ案ヲ送ツテ來タ、然ルニ此英國政府案ニハ殆ンド出來上ラントスル「ウキルソン」第三案ト融合シ得ヌ點モアルノデ、英米兩國ハ其法務顧問「ハースト」及「ハンター、ミラー」兩氏ヲシテ此兩案ヲ調整サセルコトニシタ、斯クシテ出來上ツタノガ聯盟委員會ニ配布サレタ討議基礎案デ、「ハースト、ミラー」妥協案ト呼バレルモノデア。

巴里講和會議デ聯盟委員ヲ設ケル時ノ經緯ハ概略ヲ既ニ記シタガ「ウキルソン」大統領ノ考案デハ先ヅ大國丈ケデ委員會ヲ作り規約案ヲ討議作成シタ後、小國ヲ網羅スル大委員會ヲ設ケテ此案ヲ批評スル機會ヲ與ヘントスル積リデ在ツタ、然ルニ「ロイド、ジョージ」首相ハ元來國際聯盟ハ寧ロ小國ヲ保護スル爲メニ設ケルノダカラ、小國ヲ委員會ニ參加サセルノガ至當ダト主張シ、「ウ」大統領ハ容易ニ自説ヲ曲ゲル模様が無カツタ、此ニ於テ「クレマンソー」首相ハ小國カラ五名丈許ソウト提議シ、漸ク意見ガ纏マツタ。其後小國委員ノ數ヲ更ニ四名追加シタコトハ既述ノ通りデア。

理事會ノ構成

聯盟理事會ノ存在ハ滿洲事變勃發以來我國民ニ遍ク知レ亘ツタ、國際聯盟ニ理事會設置ノ具體的提議ハ「スマツツ」案ニ於テ初メテ爲サレタモノデ、「ウキルソン」第二案ハ之レヲ其儘採用シ、大中小各國ノ代表者ヨリ成ル理事會ヲ設クルコト、中小國ノ數ハ併セテ大國ノ數ヨリ一ツ少ナキコト、ト云フ規定ヲ追加シタ。然

ルニ「セシル」案ハ聯盟ノ實際ノ仕事ヲスルノハ理事會ダカラ、大國丈ケデ之レヲ構成スベキダトノ主義ヲ採用シ、英國政府案亦同様ノ見地カラ、理事會ハ英、米、伊、佛、日カラ成ルガ、理事會ハ何時デモ互選デ理事會ヲ追加スルコトガ出來ルト規定シテ居ル、之レハ獨逸等ガ聯盟ニ加入シタ場合ニ備フル趣旨ダト思フ。聯盟委員會討議ノ基礎ト成ツタ「ハースト、ミラー」妥協案モ此主義ニ則リ、五大國ハ常ニ理事會ニ代表サレルガ、小國ハ其直接ニ利害關係アル場合ニ招請サレルト規定シタ。小國側ガ之レニ反對シタノハ勿論デ、佛伊全權亦小國側ヲ支持シ、終ニ小國ヲモ理事會中ニ加ヘルコトト成ツタガ、其數ニ付テ更ニ議論アリ、漸ク大國側ヨリ一票少ナキ四國トシ聯盟總會デ指定スルコトニ折合ツタ、然シ第一回聯盟總會ガ開カレル迄ノ非常任理事國ノ選定ニ關シテハ、到底協議ノ纏マル見込ガ立たヌノデ、大正八年四月二十八日午後開カレタ講和會議第五回總會ニ附議シタ聯盟規約ノ最終案ニモ其國名ハ無記名ノ儘ニシテ在ツタガ、其日午前ノ三頭會議ハ白、伯、希、西ノ四國ヲ指定スルコトニ決議シ、右總會ノ席上「ウキルソン」大統領ハ此國名ヲ披露シタ。

以上述ベシ如ク理事會ノ構成ニ付テハ最初カラ二ツノ潮流ガアツタ、其一ハ大國丈ケデ之ヲ組織シ、小國ハ利害關係事項ノ附議サレル時ノミ出席サセル考案デ、其二ハ中小國ニモ互選ニ依リ一定年限間ノ代表權ヲ與ヘルガ、其數ハ常ニ大國ノ數ヨリ一ツ少ナキヲ要ストノ立テ前デア。國家平等ノ純理論カラ出發スレバ、常任理事國ト非常任理事國トヲ設ケルノハ頗ル不合理ダガ、實際の見地カラ論ズレバ、世界各般ノ重要問題ヲ責任ヲ以テ討議シ解決スルヲ任務トスル理事會ニ小國代表ヲ加ヘル仕組ハ、却テ理事會ノ價值ヲ低落シ信

用ヲ減殺スル結果ト成ル虞ガアル、例ヘバ歐洲ナリ或ハ亞細亞ナリニ重大爭議ガ起ツタ場合、無關係地方ノ小國ノ代表者ハ自己ノ言議ヲ其代表スル國家ガ責任ヲ以テ執行シ得ル地位ニ在ラヌコトヲ知ツテ居ル、又之レヲ執行シタトシテモ繫争國ハ殆ンド何等ノ痛痒ヲモ感ゼヌノダカラ、彼等自身モ一種ノ討論會ニ臨ム様ナ心持デ理事會ニ出席スル、其言論ガ繫争事件ノ眞髓ニ觸レ得ヌ位ナラ未ダ恕シ得ルガ、責任感ノ多カラザル結果、一國ノ宣傳其他ニ容易ニ誘掖セラレ、或ハ一二ノ大國ニ追從シテ理事會ノ權威ヲ毀損スルコトガ少ナクナイ。

國家平等論批判

講和會議デ作ツタ聯盟規約ハ理事會ニ小國ヲモ加ヘタガ、其數ヲ極メテ局限シ又五大國ガ多數ヲ制シ得ル様ニ之レヲ構成シタ、然ルニ米國不參加ノ結果理事會ニ於ケル大國ト小國トノ數ハ同一ト成リ、獨逸加入ニ伴ヒ一九二六年更ニ改造セラレテ、非常任理事會ヲ九國ニ増加スルト共ニ、其内ノ三個國ニ再選權ヲ認メ、一方「スマツツ」案ノ豫見セル中國ト小國トノ區別ヲ具體化シタガ、之レト同時ニ理事會ノ機構ニ對スル本來ノ主義ヲ蹂躪シ、其結果同會ノ討議ヲ散漫ナラシメ、權威ヲ失墜サセタコトハ爭ハレヌ事實デアル。國家平等ノ原則ハ理論トシテ之レヲ承認スルニ何人モ異存ハナイガ、強弱貧富ノ差ハ事實上ノ現象デアリ、此相違ガ實際案件ノ處理ニ際シテ平等論ヲ壞滅サセルコトハ尠クナイ、巴里講和會議ハ少數民族保護ノ義務ヲ羅馬尼ニ負擔サセタガ、其際此等諸國ノ全權ハ極力之レニ反對シタラ、「ウキルン」大統領ハ大要左ノ如ク論

駁シテ居ル。

講和條件ノ維持ハ聯合國全體ニ繫ツテハ居ルガ、眞ノ責任ヲ取ルノハ大國デアル、恰モ世界大戦争ニ付テ大國ノ協戮ガ無カッタナラ諸問題解決ノ爲メニ目下集合スルコトガ出來ナカッタノト同様デアル、大國ノ陸海軍ガ世界平和ノ最後ノ保障ダト云フ事實ヲ見逃シテハナラヌ、勿論大國ハ司令者トシテ爾餘ノ聯合國ニ臨ムモノデハナイ、其友人トシテ「吾々ガ正當ト信ジナイ領土的解決ヲ保障スルコト」ハ出來ヌ。又世界ノ平和ヲ攪亂スル虞アリト考ヘル不安ノ元素ヲ其儘ニシテ置クコトハ承諾出來ヌ」ト云フタカラトテ、其如何ナル點ガ不公正、不合理デアルダロウカ。

羅馬尼モ塞爾比モ非常ニ廣大ナ領土ヲ増加シタガ、此膨脹シタ新國家ノ主要保障者タル大國ハ、斯クノ如キ領土的解決ガ世界平和ノ爲メデアル又決シテ之レヲ亂スモノデ無イト云フ保障ヲ得ル權利ガアル。大國ハ他國ノ事件ニ容喙セント欲スルモノデハナイ、否衷心彼ヲ支援セント欲スルノデアル。

「ブラチアノ」首相ハ少數民族保護ノ要求ヲ主權侵害ダト高調スルガ、羅馬尼ガ廣大ナ地域ヲ増加シタノハ共同勝利ノ結果デアルカラ、吾々ハ此領土併合ヲ承認スルニ當リ、平和ノ保障ヲ要求スル權利ガアル。若シ平和條件ガ遵守サレヌ場合ニハ、米國ハ軍隊ヲ送ツテ其遵守ヲ要求スル義務ガアルヲ忘レテハナラヌ。

「ブラチアノ」首相ハ少數民族保護ノ義務ヲ聯盟規約中ニ加ヘンコトヲ熱心ニ主張シタ、斯クスレバ其義務ハ各國共通ト成ルノデ、國家平等ノ見地カラスレバ實ニ正々堂々ノ提唱デハアルガ、遺憾ナガラ空論ニ終ツ

タノミナラズ、波蘭ニ此義務ヲ承認サセテ聯合國ハ、「ヴェルサイユ」條約中ニ何等類似ノ規定ヲモ設ケナカツタノデアル。

小 國 氣 質

中小國ニハ所謂中小國氣質ナルモノガアル、其一ハ中國ガ大國並ノ取扱ヲ受ケンコトニ腐心スル現象デ、大使交換國ノ増加ハ其一端ヲ示スモノデアルガ、獨逸ノ聯盟加入ニ關聯シテ脫退國ガ出來タノモ、又再選權ヲ非常任理事國ニ認ムルニ至ツタノモ、皆此意思ノ表現デアル、國際聯盟設立ノ初期ニハ理事會ヲ巴里、倫敦羅馬ト云フ様ニ、歐洲大國ノ首府デ持廻リニ開イタガ、夫レガ「サン、セバスチアン」ヤ「ブルツセル」デモ開カレルニ至ツタノハ、矢張り右ノ消息ヲ物語ルノデアル。「サン、セバスチアン」理事會ノ時筆者ハ更ニ極端ナ事實ヲ目撃シタ、理事國ノ席次ハ中央ガ議長デ、其兩側ニ國名ノ「アルファベット」順デ大國先ヅ列座シ次ニ非常任理事國ガ着席スルコトニ成ツテ居ルノニ、此理事會デ白耳義ノ席次札ガ日本ノヨリ上席ニ置テアルノヲ二回見タ、初メノ時ハ單ナル不注意ノ間違ダト思ツテ我方デ之レヲ置キ換エ氣ニモ留メナカツタガ二度目ノ時ハ甚ダ不愉快ニ感ジタ、先方デモ同ジク衝動サレタト見ヘ此度モ亦席次札ガ從來ノ規則通りニ並ベ換エテアルノヲ見テ「イーマンス」外相ハ席次札ヲ机上ニ敲キ附ケテ居タ。是レモ矢張り小國氣質ノ一ツデアルガ、彼等ハ英佛米ノ如キ押シモ押サレモセヌ列強ニハ追從盲動シテ其忌諱ニ觸レヌコトニ是レ努ムルガ、未ダ地歩ノ堅マリ切ラヌ我國等ニ對シテハ往々ニシテ猜忌的態度ヲ以テ迎ヘ、又他列強ノ歡心ヲ購フ

ガ爲メニ臭醜ナル言議ヲ弄スルコトガ尠クナイ、復タ白耳義ヲ引合ニ出シテ甚ダ氣ノ毒ダガ「イーマンス」外相ガ各國民均等待遇ニ關スル我提案ニ對シ、最初ハ寧ロ之レヲ支持シタニ拘ラズ、幾何モナク其態度ヲ豹變シテ直截ニ反對シタ如キハ其適例ダト思フ、更ニ他ノ方面カラ觀ルト小國ハ其數ヲ賴ンデ大國ヲ壓迫シニ掛カルコトガアル、昭和五年春海牙ニ置カレタ國際法典編纂會議デ國家責任問題ガ少シモ纏マリ得ナカツタノハ之レガ爲メダガ「マフロマチス」事件ニ英國ガ常設國際司法裁判所デ敗訴シタノモ其原因ハ亦茲ニ在ル之レニ付日本トシテ深ク戒心セネバナラヌコトハ、我國ノ如ク列強ノ伍伴ニ入ツテ未ダ日ノ淺イ國ニ對スル小國ノ猜忌反感デアル、昭和六年十月ノ聯盟理事會デ芳澤代表ガ無援孤立ノ地位ニ置カレタノハ、正ニ之レガ具體化トモ見ルベキデ、同時ニ小國ノ追從意識ヲ赤裸々ニ發露シタモノデアルガ、若シ日本ガ提訴義務ヲ認メ紛争ガ海牙ノ常設國際司法裁判所ニ繫屬シタ場合、裁判官ノ多數ハ果シテ適正衡平ノ見地ノミカラ法ノ適用ヲ考察審議スルデアラウカ、筆者ハ日本ニ取ツテハ仲裁約款デ裁判官ヲ指定スル從前ノ仲裁裁判制度ノ方ガ遙カニ公正ヲ期シテ居ルト思フ。